airiti

「自然書寫」之定義・緣起・系譜・特徵
：為後 3・11 日本原発文學研究奠定理論基礎

曾秋桂
淡江大學日本語文學系教授

摘要

烏爾利希·貝克(Ulrich Beck 1944－)於著作《風險社會》(1986)一書當中，將現代社會稱為「風險社會」，並主張產業發達進入「第二近代」新的時代之後，社會充滿了空前未見的「新風險」。即使是人類社會所產出的文明產物，但人類的現今的技術無法妥善處理核廢料或輻射外洩的問題。此類問題正是烏爾利希·貝克所稱的「新風險」。而此「新風險」在東日本大震災之後(後 3・11)，以更明確的形式出現，威脅含日本的全球化人類社會的生存。

特別是在 3・11 之後，日本社會普遍出現依賴產業技術的價值觀崩壞而覓求新價值觀。而面臨此時此刻，在歐美常將「自然書寫」有効地利用於考察人類與自然（生態・環境）間的關係，值得借鏡來分析後 3・11 日本原發文學。

本論文為奠定後 3・11 日本原發文學的研究理論基礎，先試著回顧、彙整「自然書寫」定義、緣起、系譜、特徵。並概觀日本國內「自然書寫」相關學會的學術活動。進而自期勇於扮演承先啟後的角色。

關鍵字:後 3・11　日本原發文學研究　自然書寫　生態文學

airiti

About the definition, origin, genealogy, and the feature of Nature Writings : Aiming at the nuclear power plant literary researches of Japan after 3-11

Tseng, Chiu-kuei
Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

The " risk society " (1986) of Ulrich Beck (1944-) is calling modern society "risk society." Industrial society has entered in the new "second modernization", and he says that our society has come to hold "a new risk" of not having existed before. Nuclear waste and the radiation of loss of control which human society has produced are just the "new risk" itself. Such "a new risk" takes a clear form after 3.11, and has become a survival crisis of the all mankind of global society including Japan.

In Europe and America, the "nature writing" has often been used as the effective technique of considering the relation between man and nature. If this is applied to the nuclear power plant literature of Japan after 3-11, it is effective.

This paper is aimed at arranging briefly the definition, origin, genealogy, and the feature of a "nature writing" as a preparatory step.
For the same purpose, this argument surveys activity of the academic societies related to "nature writing" in Japan, and expects that Taiwan can also take part in the research activities of ASLE which can also be said to be a new international organization from now on.

Keywords: after 3-11, nuclear power plant literary researches of Japan, nature writing, ASLE

airiti

ネイチャーライティングの定義・起源・系譜・特徴
―ポスト 3・11 日本原発文学研究を射程に―

曾秋桂
淡江大学日本語文学科教授

要旨

ウルリッヒ・ベック(Ulrich Beck 1944－)は『リスク社会』(1986)の中で、現代社会を「リスク社会」と呼んで、産業社会が新たな時代の「第二の近代」に入り、いまだかつて見られない「新しいリスク」を抱えるようになったと主張した。人間社会が生み出した文明の産物であるにも関わらず、制御不能の核廃棄物や放射線などは、まさにベックが言った「新しいリスク」そのものである。こうした「新しいリスク」は、ポスト 3・11、さらに明確な形をとって、日本を含むグローバル社会の全人類に生存の危機として迫ってきている。

ポスト 3・11 の現在、新しいパラタイムが求められる日本社会では、人間と自然（生態・環境）との関係を考察する上で有効な手法として欧米でよく使用されてきた「ネイチャーライティング」を、ポスト 3・11 日本原発文学に援用することは、格別に意味深長である。

本論文は、「ネイチャーライティング」をポスト 3・11 日本原発文学研究に援用する目的で、その準備段階として「ネイチャーライティング」の定義、起源、系譜、特徴を一通り整理することを目的とするものである。と同時に、日本における「ネイチャーライティング」関係学会の活動を概観し、新しい国際組織とも言える ASLE の研究活動に台湾も今後参与できるよう期待している。

キーワード：ポスト 3・11　日本原発文学研究
ネイチャーライティング　ASLE

airiti

ネイチャーライティングの定義・起源・系譜・特徴

―ポスト 3・11 日本原発文学研究を射程に―

曾秋桂
淡江大学日本語文学科教授

1.はじめに

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に日本が未曾有の「三位一体の受難」[1](地震・津波・原発事故)に見舞われたことを、「東日本大震災」(2011.3.11、通称 3・11)と言う。2 周年を過ぎた今日も、被害収拾のメドは立っておらず、事態は深刻になる一方である。そうした厳しい環境に直面すると、ドイツの社会学者、ウルリッヒ・ベックが主張した「リスク社会」の言葉が改めて思い出される。ウルリッヒ・ベックが 1986 年に出版し、欧米でベストセラーとなった『危険社会』[2]では、現代社会を「リスク社会」と呼んで、産業社会が新たな時代の「第二の近代」に入り、いまだかつて見られない「新しいリスク」を抱えるようになったという。今回の 3・11 大震災で大変な惨禍をもたらしている福島原発爆発事故も人間社会が生み出した文明産物であるにも関わらず、まったく制御不能の核廃棄物や放射線などは、まさにベックが言った「新しいリスク」そのものである。こういった「新しいリスク」は、ポスト 3・11 の現在、さらに明確な形として日本を含むグローバル社会の全人類に生存の危機として迫ってくる。

生態・環境は、今までの人類の歴史の中でも人間が生活の便利を図り、文明を求めるために、常に破壊されてきたが、如何なる生物

[1]マニュエル・ヤン(2012.2)「負債資本主義時代における黙示録と踊る死者のコモンズ」河出書房新社編集部編『歴史としての 3・11』河出書房新社 P93 では、「3・11 における三位一体の受難(地震/津波/原発事故)は死の覚悟をわたしたちに植え付けた」とある。

[2]ウルリッヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳(1998)『危険社会―新しい近代への道』法政大学出版局、台湾では、Ulrich Beck 著・汪浩訳(2004)『風險社會―通往另一個現代的路上』巨流図書公司が、国立編訳館の責任のもと出されている。

airiti

も生命活動を営んでいくために、否応なしにその生態・環境と関わらなくてはならないという現実は変わらない。環境がどんなに悪化しても、文明がどんなに発達しても、生物である以上、人間も又同じ制約を受けることになる。特に自然と対決することで強大な文明を形成してきた西欧世界では、そのため人間と自然をめぐる文学創作が自然な文学ジャンルとして近代文明の発達とともに形成されてきた。こうした人間と自然との関係を主題に扱った文学作品は、「ネイチャーライティング」(nature-writing)と呼ばれている。

特に、ポスト 3･11 新しいパラタイムが求められる日本社会では、人間と自然（生態・環境）との関係を考察する上で有効的な手法として使用されてきた「ネイチャーライティング」は、ポスト 3・11 日本原発文学への援用によって、さらに大きな意味を帯びてきている。「ネイチャーライティング」としてのポスト 3・11 日本原発文学を内容を見る前に、「ネイチャーライティング」に関する学術的論説をまず整理しておきたい。

そこで、本論文は、ポスト 3･11 日本原発文学への援用を射程に、その準備段階として今までの「ネイチャーライティング」の定義、起源、系譜、特徴を一通り概観することにする。

2.「ネイチャーライティング」の定義と起源

まず、「ネイチャーライティング」の定義から見てみよう。

2.1 ネイチャーライティングの定義

「ネイチャーライティング」は英語の「nature-writing」である。その定義は論者によって様々だが、管見する限り、論文雑誌によく見られる諸研究者が定義したものを下記のように羅列してみる。

①自然と人間とのかかわりを省察する「一人称形式によるノンフィクション」を指している。また特に環境文学という場合には、ノンフィクッションから詩や小説や演劇まで、自然が

airiti

クローズアップされるすべての文学を含むことになる[3]。

②一般に自然に関するノンフィクションのエッセイのことを指す[4]。

③人間と自然との関係を前景化する言語表象行為とみなすことができる[5]。

④自然界と人間、社会との関係について言及した文学作品[6]。

⑤自然と人間のかかわりを省察した一人称形式のノンフィクション文学のことである。この文学用語は 20 世紀初頭に用いられるようになった[7]。

⑥「科学的言説と詩的語りの結合した」スタイルによって「自然と人間の関わり」を省察する「一人称形式のノンフィクション」という形式をとっている。(中略)「観察対象と観察主体の相互的な関係」が焦点となり、その記述は、「自然と人間との交感的関係」を描いたものとなる。それによって人間社会がいかにしてこの地球の現実と「実質的な関係」を結びうるか、ということを考えてきた[8]。

上掲の 6 つの定義を見る限り、自然と人間との関わりが最大公約数的に見られる。そして、「一人称形式のノンフィクション」も条件の一つとされているが、必ずしも必須条件ではない。これらの諸説を融合した加藤貞通は、「一般に、自然と人間との関係を主題とする

---

[3]文学・環境学会編(2000)『たのしく読めるネイチャーライティング　作品ガイド 120』ミネルヴァ書房 i-ii

[4]野田研一(2003)『交感と表象』松柏社 P11

[5]生田省悟(2004)「覚醒する＜場所の感覚＞―人間と自然環境をめぐる現代日本の言説」野田研一・結城正美編『環境文学論序説　越境するトポス』彩流社 P20

[6]荒井宏祐(2007)「J. J. ルソーにおけるネイチャーライティング(環境文学)」『文教大学国際学部紀要』第 17 巻 2 号文教大学 P14

[7]黒崎真由美 (2009)「アメリカ、日本およびオーストラリアにおけるネイチャーライティング」『湘北紀要』30 号湘北短期大学 P81

[8]松岡幸司 (2011)「『1842 年 7 月 8 日日蝕』: 翻訳と解説―ネイチャーライティングとしてのシュティフター」『信州大学人文社会科学研究』第 5 号信州大学人文社会学科研究会 P142

airiti

ノンフィクション、エセッイを指す。自然・環境を扱う野外ガイド、日記や紀行文、科学的または哲学的・文明論的考察、ドキュメンタリー映画なども含まれる。“ネイチャーライティング”と、詩や小説、演劇など従来の文学ジャンルの自然・環境に関わる著作とを併せた、より広い範囲をさす“環境文学”(environmental literature)という用語は欧米の大学の科目名などにおいても使用され始めている」[9]と指摘している。それだけではなく、「ネイチャーライティング」(nature-writing)と環境文学(environmental literature)との異同やそれを中心に展開された学会活動について、加藤貞通は、さらに「これら二つの用語(ネイチャーライティングと環境文学のこと・論者注)の定義の違いにはこだわらず、両者をひっくるめて研究対象とする学会が出来ている。(米国のASLE―Association for the Study of Literature and Environmentの略―は1992年に発足、日本ではASLE－Japan/文学・環境学会が1994年に発足。英国ではASLE－UKが1998年に発足した。その後ニュージランド、カナダ、インド、韓国、ヨーロッパにASLEが次々と誕生している)」[10]と述べている。このように、ASLEが1992年にアメリカで発足して以来、各国も続々とASLEを成立し、環境文学関係の研究を進めている[11]。台湾でも「中華民國文學與環境學會(ASLE-Taiwan)」が2009年に設立され、2代目の理事長蔡振興が編集した『生態文学概論』[12]は、環境文学の発展史を全般的に理解する上で、大変参考になる。それに、「生態と文学」をメインテーマにした季刊『世界文学』(第4期)[13]と合わせて読むと、台湾の中でも先鋭的な視点から環境文学を試みた論文の一端を知ることもできる。両著作は、まさしく台湾における環境文学研究を開拓する上で、記

[9]加藤貞通(2007)「環境文学入門:自然とのコミュニケーションを回復する」『メディアと文化』第3号名古屋大学大学院国際言語文化研究科P107
[10]前掲加藤貞通論文P107
[11]2013年の現時点では、全世界凡そ9つの関係学会が出来た。
[12]蔡振興主編(2013.7)『生態文学概論』書林出版有限公司
[13]黄逸民主編(2012.12)『世界文学』第4期淡江大学・聯経出版公司

airiti

念すべき一頁を残した書物だと言える。

要するに、加藤貞通は「ネイチャーライティング/環境文学は、そういう意味での自然界とのコミュニケーション回復を目指す文学である。人間による収奪的利用(植民地化)が一層深刻なりつつある自然界の健康と、その一部としての身体の健康をいかに回復するのか、今すべての人が問われている」[14]と述べているが、この定義は、20 世紀末からアメリカで始まった ASLE の活動にまさに相応しい。論者も、加藤貞通の定義に従い、人間による収奪的利用(植民地化)が一層深刻なりつつある自然界と人間とのコミュニケーション回復を目指す幅広い視野で、ポスト 3・11 日本原発文学の研究に取り組んでいくことにする。

2.2「ネイチャーライティング」の起源

次に、「ネイチャーライティング」の起源を回顧してみよう。

松岡幸司によると、「ネイチャーライティング」の起源は「18.19 世紀にさかのぼ」[15]り、「ヘンリー・ディヴィッド・ソローの『森の生活』のスタイルを伝統の一つとして発展している」[16]という。また、加藤貞通は「欧米の場合ネイチャーライティング/環境文学の源流は、自然誌(natural history)の伝統である」[17]とし、発祥地及び学会発足地の「アメリカのネイチャーライティング/環境文学を特徴づけるもののひとつは、ウィルダネス(wilderness)の概念である」[18]と指摘している。この概念は、19 世紀から 20 世紀にかけて「否定的な意味合いから肯定的な意味合いに変化し」[19]た。そのウィルダネスの肯定な評価とは、「エコロジー(生態学)の観点から見て十全な土地という意味合いと、近代文明に縛られていない自由な生き方の

[14]前掲加藤貞通論文 P110
[15]前掲松岡幸司論文 P142
[16]前掲松岡幸司論文 P142
[17]前掲加藤貞通論文 P110
[18]前掲加藤貞通論文 P108
[19]前掲加藤貞通論文 P108

airiti

土地」[20]の 2 点において注目されている。「近代ネイチャーライティングのスタイルを確立した」[21]と言われた H.D.ソローが書いた『ウォールデン』は、「エコロジーの古典とみなされ、この作品にならって「ネイチャーライティング」という環境文学の一分野も生まれている」[22]という。

3.ネイチャーライティングの系譜と特徴

「ネイチャーライティング」の系譜と特徴に関して、次のように纏められる。

3.1「ネイチャーライティング」の系譜

「ネイチャーライティング」の系譜であるが、篠田知和基は「ネイチャーライティング」を、「ソローのタイプの自然賛美、あるいは自然体験と、「苦界浄土」(正しくは「苦海浄土」・論者注)のタイプの公害告発とを含む」[23]と、明確に指標を設けて分類している。「ネイチャーライティング」は、大きく H.D.ソロー(Henry David Thoreau 1817-1862) が『ウォールデン』(1854)で讃えた自然賛美[24]あるいは自然体験と、石牟礼道子(1927-)が『苦海浄土　わが水俣病』(1969)で訴えた水俣病などの公害告発の 2 種類に分かれると見てよい。

3.2「ネイチャーライティング」の特徴

「ネイチャーライティング」の特徴について荒井宏祐は、「ネイチャーライティング」には「場所の感覚」、「環境問題文学との関連」、

---

[20]前掲加藤貞通論文 P108
[21]前掲荒井宏祐論文 P16
[22]中島邦雄(2007)「環境文学の系譜――D.H.ソロー、H.パーシェ、石牟礼道子――(1)」『かいろす』45 号 P72
[23]篠田知和基 (1999)「環境文学から見たフランス文学」『古屋大学文学部研究論集(文学)』45 号名古屋大学文学部 P247
[24]前掲中島邦雄論文では、H.D.ソローを「彼は反人間中心主義者というよりも、むしろ人間中心主義者だったのであり、人間を啓蒙するために、つまり結局人間のために作品を書いたということができる」(P81)とし、「H.D.ソローがほとんど無意識のうちに、人間中心主義的なモラリストと反人間中心主義的なナチュラリストとの間を自由に行き来できたのはそうした事情による」(P85)と分析している。

airiti

「交感と表象」の３つの特徴[25]があるとしている。

3.2.1 場所の感覚(sense of place)

生田省悟は「場所の感覚」を、「人間が場所との関係においてアイデンティティを獲得、あるいは再確認する行為の中核をなす感覚」[26]と言い、「「場所」を経験」していき、生態系の一部としての自己を知り、「自分が誰であるか」を認識して、自然の豊かさに自分の豊かさを重ね合わせたり、それらを通じて「環境の崩壊や危機的状況が、自らの生の危機に等しい」とみなしたりする」[27]と説明している。それに先行して、野田研一は、「場所の感覚」を「アイデンティティの獲得や再確認」、「生態系につながる存在としての自己及びその豊かさや危機と自己との関係の知覚」、「近代社会の知性に圧迫された自己の生の再確認」[28]の３つに細分化している。

3.2.2 環境問題文学との関連

杉野元子は「ネイチャーライティング」を、「人々の大自然に対する愛と環境悪化に対する憂慮を喚起する文学」[29]として捉えている。

3.2.3 交感（correspondence）と表象

野田研一は、「人間と自然の間に何らかの対応関係を読みとる思想を動かす原理」[30]を「交感」とし、荒井宏祐は、このコレスポンデンス原理を応用すれば、自然描写、風景描写には、「外的自然と内的自然の対応、交感の例が多く見られる」[31]と指摘している。そして、表象については、野田研一は「雪や馬といった自然物が代行=表象的に指示するその「内的諸事実」=意味に焦点を合わせている。このときこそ、雪や馬が象徴として機能するときにほかならない。その際、自然物という外的諸事実はいかにもエマソン的意味合いにおいて、

---

[25]前掲荒井宏祐論文 P14
[26]前掲生田省悟論文 P23
[27]前掲生田省悟論文 P14
[28]前掲野田研一著作 P113-114
[29]杉野元子(2001)「現代中国の環境文学」柴田陽弘編『自然と文学　環境論の視座から』慶応義塾出版会 P262
[30]前掲野田研一著作 P19
[31]前掲荒井宏祐論文 P20

airiti

「透明的」な存在と化している」[32]と説明している。さらに、荒井宏祐は「内面にあるさまざまな思いを自然に託して述べたり、自ら信じるところの例証を自然に求めたりしている。これらはいわば自然の記号化=表象化とも言える」[33]としている。

近代文明の発達と共に生まれて来た新しい文学ジャンルである「ネイチャーライティング」として、ポスト3・11原発文学を検証するには、上述の「場所の感覚」、「環境問題文学との関連」、「交感と表象」の3つの特徴を拠り所にすることの有効性が再確認された。

4.日本における環境文学研究の現状

日本では、学会という組織で環境文学の研究を進めていくには、ASLE－Japanがある。ASLE－Japanを抜きにしては、日本における環境文学の現状を語ることが出来ないため、まず、ASLE-Japanの活動から見てみよう。

4.1 ASLE-Japanの発足と学術活動

ASLE-Japanは、「the Association for the Study of Literature and Environment in Japan」の略称で、「アズリージャパン」と呼ばれ、ASLE-Japan／文学・環境学会と公式的に表示されている[34]。次にその発足と活動を見てみよう。

4.1.1ASLE-Japan／文学・環境学会の発足と方針

ASLE-Japan／文学・環境学会の公式なホームページによる[35]と、文学における自然・環境に関する内外の研究・情報を交換し共有することを目的に、1994年5月にASLE-Japan／文学・環境研究会として発足し、自然や環境の問題を文学の観点から検討すること、また文学研究に自然や環境の問題を導入することにおいて、積極的な役割を果たしていこうとする学会で、環境文学、エコクリティシズム、

[32]前掲野田研一著作P78
[33]荒井宏祐(1998)「J-Jルソーにおける自然環境の認識と社会的ジレンマ問題」『文教大学国際学部紀要』第9巻第1号文教大学P6
[34]http://www.asle-japan.org/(2013年8月13日閲覧)
[35]http://www.asle-japan.org/(2013年8月13日閲覧)

airiti

エコフェミニズム、環境思想をはじめ、環境をめぐる言説に関心のある学者を多く応募しているということである。

4.1.2 学術活動

ASLE-Japan／文学・環境学会が年に 2 回 Newsletter(ニューズレター)を発行し、活動状況、学会情報、書誌情報、会員によるエッセイを掲載し、現在、最新 34 号(2013.6.30)の公開中である。

また、毎年の全国大会のほかに、国際大会をも開催している。現在まで、国際シンポジウムを、ASLE 日米シンポジウム（ハワイ、1996 年 8 月）と ASLE 国際シンポジウム（沖縄、2003 年 3 月）の 2 回を主催したが、2014 年東アジア ASLE 合同シンポジウムの開催を沖縄で予定している。

1994 年の創刊以降年に年に 1 回会誌『文学と環境』を発行し、現在、『文学と環境』No.15(2012 年度)を公開中である。そこに、自然・環境をめぐる書き手たちへのインタビューをはじめ、会員の研究論文、海外文献紹介、全国大会のシンポジウム報告、書評等が幅広く収録されている。環境文学の研究分野を広げるように、ホームページには、日本語で書かれた環境文学関連の用語集を公開し、相関研究の成果あるいは著作を合わせて紹介している。

このように、ASLE-Japan／文学・環境学会は、日本における環境文学の研究分野への開拓に力を注いでいる意欲が見られる。

4.1.3 会誌論文の内容

公開中の会誌『文学と環境』No.15(2012 年度)までの 15 冊を見ると、内容はバラエティーに富んでいる。ASLE 学会の始発であるアメリカからの影響もあるであろうが、外国人作家による作品を取り扱う研究論文が数多く見られる。一方、日本人作家による作品を取り扱う研究論文のほうはまだ少ないようである。

当学会が発行した会誌のほかに、他誌に掲載された研究論文をも、当学会はホームページに熱心に紹介している。その貴重な情報からも、外国人作家による作品を多く取り扱うことの代わりに日本人作家による作品を取り扱う研究論文がまだ少ないという傾向が同じく

airiti

見られる。どのような日本人作家による作品がよく取り扱われたかを知るために、とりあえず、それに関係する研究論文・口頭発表・講演だけを以下のようにピックアップし、表１のように表示する。

表１　日本人作家による作品の研究論文・口頭発表リスト

通番	作者名	論文名	公開場・掲載誌
1	岩政伸治	「Gary Snyder のみた宮沢賢治の自然」	Soundings 第 21 号 (1995)P159-174
2	岩政伸治	「Snyder にみる宮沢賢治の修辞学」	『桐朋学園大学研究紀要』第 25 集(1999)P63-74
3	岩政伸治	「Snyderと宮沢賢治の「場所」の意識をめぐって」	西田幾多郎記念館付属精神文化研究所第19回夏期哲学講座 1999.8.23宇ノ気町役場。
4	岩政伸治	「ソローと宮沢賢治ーネイチャー・ライティングを基本に」	日本ソロー学会全国2003.5.23 慶應義塾大学
5	岩政伸治	「ソローと賢治の「時間」の意識」	『ヘンリー・ソロー研究論集』第 30 号 (2004)P44-57
6	アレン、ブルース	「石牟礼道子『天湖』にみる多次元的世界」	『越境するトポスー環境文学論序説』彩流社、(2004、P273-290)

airiti

7	岩政伸治	「アメリカにおける環境文学の動向と宮沢賢治の受容」	岩手大学招聘2008.6.13岩手大学
8	山田悠介	「自然と人間のやりとり―『海のふた』における「くれる」「てくれる」の研究―」	文学・環境学会2008年度全国大会2008.10.13国立大学研修九重共同研究所
9	山田悠介	「『あたし』と『私』―吉本ばなな『キッチン』の隠喩的コード・スイッチング―」	早稲田大学日本語学会2009年度前期研究会2009.7.4早稲田大学
10	浅井千晶	「『崖の上のポニョ』における海辺の両義性」	第38回奈良女子大学英語英米文学会2009.11.28奈良女子大学
11	結城正美	「『苦海浄土』における汚染と食の言説」	『アジア遊学』2011.4

表１に示したように、日本人作家は、ほぼ日本の児童文学作品の代表作家宮沢賢治をはじめ、日本アニメ作家宮崎駿、水俣公害を告発する作家石牟礼道子に限られている。論文のテーマを見ても分かるように、比較の視点が活用されている。もちろん、「文学研究に自然や環境の問題を導入することにおいて、積極的な役割を果たしていこうとする」[36]ことを目標に掲げたASLE-Japanの宗旨に合致しているが、如何に環境文学の理論を応援し、日本人作家による作品へ

[36]http://www.asle-japan.org/(2013年8月13日閲覧)

airiti

の探求を深めるかは、ASLE-Japan にとっても避けては通れない課題の一つだと言えよう。

4.2「環境マインド」[37]教育を目指す試み

「環境文学」(environmental literature)という用語が欧米の大学の科目名に使われるように、日本の大学でも、環境教育への意識向上と相まって、例えば、「環境〇〇」と付けた学科、科目も増加している[38]。特に、授業のデザインに環境を積極的に取り入れた大学の動きが見られる。例えば熱心に環境教育を取り組んだ信州大学は革新的である。信州大学では、「環境科学群」の 2 単位を必修としているが、2011 年度に「環境の構造と動態(計 16 コマ)」、「環境と社会(24 コマ)」、「環境と技術(計 15 コマ)」の 3 つの科目、計 55 コマ相当の講義やゼミが開講され、「環境と社会」の科目には「環境文学のすすめ」が入っている[39]。2009 年から 2011 年に至る 3 学年度、「環境文学のすすめ」で扱った授業のコンテンツの中で、日本人作家による作品は、宮沢賢治と石牟礼道子に集中している[40]ようである。「4.1.3 会誌論文の内容」で上述した内容とは、ほぼ同じ傾向を示している。如何に環境文学の理論を応援し、日本人作家による作品への探求及び教育を拡大していくかは、今後の日本の大きな課題ととして残されていると言えよう。

4.3 エコクリティシズム研究学会(SES-Japan)の成立と学術活動

SES-Japan は(The Society for Ecocriticism Studies in Japan)がある。SES-Japan のホームページ[41]によると、1994 年 6 月に広島大学にスコット・スロヴィック現アイダホ大学教授が来学された折

---

[37]松岡幸司(2012)「環境マインド育成における文学の可能性：教養科目「環境文学のすすめ」の射程」『信州大学人文社会学科研究』第 6 号信州大学人文社会学科研究会 P241 で、「環境マインド」とは、「地域環境に関する理解」、「環境基礎力」、「環境実践力」の 3 つであると述べている。

[38]長崎大学には環境学部があり、そこに「長崎大学文化環境研究会・環境政策研究会」が付属し、環境関係の書物を出版発行している。

[39]前掲松岡幸司論文 P241-242

[40]前掲松岡幸司論文 P246

[41]http://www.ses-japan.org/(2013 年 10 月 28 日閲覧)

airiti

の講演会とセミナーに端を発し、環境文学と環境批評、エコクリティシズムという新しいジャンルに関心を持つ有識者を集めて発足した組織である。

2010 年（第 23 回）まで不定期的に研究会を開き、その後、年に 1 回研究会を続けている。2012 年 10 月より、研究会を研究学会として改組し、報告誌『エコクリティシズム研究会会報』(No. 1-4) を改め、研究誌『エコクリティシズム・レヴュー』を 2008 年から年 1 回発行し、2013 年に第 6 号(2013)を公開した。環境批評で作品、作家、文化を読み解く論文、環境文学名作シリーズ、講演論文、研究報告、シンポジウム特集論文、海外学会報告、環境文学の窓などコラムを掲載し、エコクリティシズムで開かれる文学の新しい姿を知る、文字通り「窓」を形成し、会の年間の研究活動を、進行形でトータルに表現し、切磋琢磨の場としている。2013 年 11 月から使用した SES-Japan の新しいホームページでは、エコクリティシズム的な新しい領域の 13 項目[42]の、「汚染と身体」、「自然の再発見」、「自然と植民地主義」、「土地の歴史と喪失」、「いきものを語る」、「食と農業」、「エコシステムの崩壊」、「アクティヴィズムと環境正義」、「都市環境と越境」、「音楽と映画」、「核と災害」、「SF とエコロジー」、「ポスト・ヒューマン/ポスト・ネイチャー」という研究テーマを提示している。こうしたテーマに見られるように、SES-Japan は、環境文学研究から、さらに一歩踏み込んで、環境批評の境地に向かう意欲が感じられる。特に、2013 年に開催されたシンポジウム特集論文のテーマを「災害・文学・メディア」にしたことは、ポスト 3・11 の現状から目を逸らさずに直面する研究意欲が強く感じられる。

ポスト 3・11 の日本で大きな困難に直面している言論と文化の状況を考えたとき、文明批評の新しい局面として SES-Japan のような、環境批評を発展させようとする動きの今後の活躍に大いに期待したい。

---

[42]http://www.ses-japan.org/(2013 年 11 月 19 日閲覧)

airiti

5.おわりに

本論文は、ポスト3・11日本原発文学への援用を射程に、その準備段階として今までの「ネイチャーライティング」の定義、起源、系譜、特徴を一通り概観してきたが、見えてきた方向性を再び以下に纏める。

20世紀末からアメリカで始まったASLEの活動に相応すべく、今後も、論者は「ネイチャーライティング」について加藤貞通が下した定義に従い、人間による収奪的利用(植民地化)が一層深刻なりつつある自然界と人間とのコミュニケーション回復を目指すという幅広い視野で、ポスト3・11日本原発文学の研究に取り組んでいく。

「ネイチャーライティング」としてのポスト3・11日本原発文学を検証する際、「場所の感覚」、「環境問題文学との関連」、「交感と表象」といった3つの特徴を有効的に利用し、対象作品を具体的に検証することにする。これは作品分析の視点として重要な方法的観点となる。

なお、今後の課題であるが、日本では、同じく1994年に発足し、全人類の生存危機に関わる環境を真剣に向き合うASLE-Japan／文学・環境学会（1994）と、エコクリティシズム研究学会(SES-Japan)の両学会があり、それぞれ信念、方針を独自に持っているが、ウルリッヒ・ベックが主張した「リスク社会」の概念を改めて思い起こすとき、両学会の信念、方針に呼応し、台湾でも同じ方向での文学研究を広げていきたい。また全世界で現時点で生まれている9つのASLE学会を有する、新しい国際組織とも言えるASLEの研究活動に参与できるよう、「ネイチャーライティング」としてのポスト3・11日本原発文学の研究を堅実に積み重ねることで、環境と人類という大きなテーマに取り組んでいくことを今後の課題とする。

参考文献

(一)著作・論文・機関雑誌

ウルリッヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳(1998)『危険社会―新

airiti

しい近代への道』法政大学出版局
荒井宏祐(1998)「J-Jルソーにおける自然環境の認識と社会的ジレンマ問題」『文教大学国際学部紀要』第9巻第1号文教大学
篠田知和基（1999)「環境文学から見たフランス文学」『古屋大学文学部研究論集(文学)』45号名古屋大学文学部
文学・環境学会編(2000)『たのしく読めるネイチャーライティング作品ガイド120』ミネルヴァ書房
杉野元子(2001)「現代中国の環境文学」柴田陽弘編『自然と文学　環境論の視座から』慶応義塾出版会
Ulrich Beck 著・汪浩訳(2004)『風險社會—通往另一個現代的路上』巨流図書公司
加藤貞通（2007)「環境文学入門：自然とのコミュニケーションを回復する」『メディアと文化』第3号名古屋大学大学院国際言語文化研究科
中島邦雄(2007)「環境文学の系譜——D.H.ソロー、H.パーシェ、石牟礼道子——(1)」『かいろす』45号
荒井宏祐(2007)「J.J.ルソーにおけるネイチャーライティング(環境文学)」『文教大学国際学部紀要』第17巻2号文教大学
黒崎真由美（2009)「アメリカ、日本およびオーストラリアにおけるネイチャーライティング」『湘北紀要』30号湘北短期大学
松岡幸司（2011)「『1842年7月8日日蝕』：翻訳と解説—ネイチャーライティングとしてのシュティフター」『信州大学人文社会科学研究』第5号信州大学人文社会学科研究会
松岡幸司(2012)「環境マインド育成における文学の可能性：教養科目「環境文学のすすめ」の射程」『信州大学人文社会学科研究』第6号信州大学人文社会学科研

airiti

究会
マニュエル・ヤン(2012.2)「負債資本主義時代における黙示録と踊る死者のコモンズ」河出書房新社編集部編『歴史としての3・11』河出書房新社
黄逸民主編(2012.12)『世界文学』第4期淡江大学・聯経出版公司
蔡振興主編(2013.7)『生態文学概論』書林出版有限公司
(二)インターネット資料
「ASLE-Japan／文学・環境学会」
http://www.asle-japan.org/(2013年8月13日閲覧)
「SES-Japan」(エコクリティシズム研究学会)
http://www.ses-japan.org/(2013年10月28日閲覧)

(本論文は102年度国科会補助専題研究計画(NSC102-2410-H-032-079-)による成果の一部である。)

※2013年10月31日受理　2013年12月25日審査通過